

令和7年 春季俳句講座

「第一句集を読む―師系を超えて(8)」

第1回 山西 雅子

『洗禮』古賀まり子

「いのちと愛」

『洗禮』は「清瀬」「運河のほとり」の二部構成である。

重症の結核による長い病臥から生まれた句、奇跡的に社会復帰できた後の熱い思いから生まれた句を時系列に従って読む。

山西雅子 略歴

昭和三十五年 大阪府生まれ

平成元年 岡井省二に師事。俳句をはじめ

平成二年 「晨」入会

平成三年 「晨」退会、「槐」創刊にともない、同人

平成四年 第一回「槐」賞受賞

平成九年 『夏越』（花神社）

平成十三年 岡井省二死去にともない「槐」退会

平成二十年 「星の木」創刊、同人

平成二十一年 『沙鷗』（ふらんす堂）

平成二十二年 「舞」創刊、主宰

令和五年 『雨滴』（角川書店／第12回星野立子賞）

「舞」主宰 「星の木」同人 俳人協会評議員

日本文藝家協会会員 「婦人之友」生活句集欄選者

著書 『俳句で楽しく文語文法』（角川選書）『花の一句』

（ふらんす堂）『俳句づくり役に役立つ！ 旧かな入門』

（NHK出版）など

古賀まり子 略歴

大正十三（一九二四）年四月九日、神奈川県横浜市磯子に生まれる。

大正十五（一九二六）年 二歳

小児麻痺にかかり右足不自由となる。

昭和十六（一九四一）年 十七歳

四月 帝国女子医学薬学専門学校薬学科に入学。

昭和十七（一九四二）年 十八歳

十一月 肺門リンパ性結核にて休学。

昭和十八（一九四三）年 十九歳

四月 復学（通院しつつ勉学）。

十二月 父が戦死。海軍軍属無線局長。

昭和十九（一九四四）年 二十歳

九月 結核性腹膜炎併発。母校の附属病院・稲毛額田研究所に入院。「夕日ヶ丘句会」（回覧句会）に投句。

昭和二十（一九四五）年 二十一歳

九月 退学

十月 馬酔木研究会に入会、水原秋桜子の添削指導を受ける。

昭和二十一（一九四六）年 二十二歳

「馬酔木」七月号、初投句初入選。

昭和二十四（一九四九）年 二十五歳

十一月 国立療養所清瀬病院に入院。山田文男の指導を受け、多くの句友に出会う。

参考

父亡きあとの母へ、苦勞のみ多くかけ、何も報いる事なく死んでゆく身なら、せめて、生の証し、魂の訴えとして句を遺してゆきたい。再び癒える事を望めない身なら死迄を、心のままに詠んでゆきたい。

『洗禮』「後記」より

昭和二十七（一九五二）年 二十八歳

二月 病床受洗 日本福音ルーテル東京池袋教会員。

参考 風花や受洗の朝の髪梳かる 『洗禮』所収

十二月 馬酔木賞（後の新人賞）受賞。

昭和二十八（一九五三）年 二十九歳

十二月 胸部手術・肺区域切除を受け奇跡的に恢復。

昭和二十九（一九五四）年 三十歳

一月号より「馬酔木」同人。

昭和三十一（一九五六）年 三十二歳

五月 退院。静養し社会復帰に備える。

十一月 病院勤務を開始。

昭和三十九（一九六四）年 四十歳

五月 第一句集『洗禮』刊行。

昭和五十六（一九八一）年 五十七歳

七月 第四句集『豎琴』刊行。（第21回俳人協会賞）

昭和五十九（一九八四）年 六十歳

四月 「馬酔木」退会。

五月 「椽」創刊に伴い同人として参加。

平成二六（二〇一四）年二月十四日没、八十九歳。

参考 紅梅や病臥に果つる二十代 『洗禮』所収

資料2

『洗禮』とは

昭和三十九年五月、麻布書房刊

水原秋桜子の「序」、藤田湘子の「跋」。

『洗禮』の構成上の特徴

全四三八句

一部「清瀬」一四四句。結核病臥中の作。

「緑蔭」昭和二十五年迄

(二十四、二十五年の二年間。二句のみ二十一年)

「罌粟の昼」同二十六年

「寒林」同二十七年

「紅梅」同二十八年

「晚涼」同二十九年

「花いちご」同三十年

「さくら散る」同三十一年

二部「運河のほとり」二九四句。結核が癒えたのちに病院事務職に就いた日々の作。

「走り梅雨」昭和三十二年

「遠き辛夷」同三十三年

「藤淡く」同三十四年

「蟻の町」同三十五年

「風花」同三十六年

「春疾風」同三十七年

「春雪」同三十八年

『洗禮』の表現上の特徴

① 平明である。

② 人間を詠む、心を詠む句が極めて多い。

資料3

『洗禮』の俳句

一部「清瀬」

「緑蔭」昭和二十四年・二十五年 二十五・二十六歳

(二句のみ二十一年 二十二歳)

冒頭六句

街の音とほく埠頭の木々芽ぶく

虫籠を月さす方へ吊りかへて(二十一年 二十二歳)

鶏頭にさし来る夕日消えやすく

山茶花に立ちて入日を見て居りぬ

(二十一年 二十二歳)

窓の風遠し病む身の今日も暮れ

松飾る病者ばかりが相寄りて

夕焼けぬ壁にすがりて立てる身も

おほかたは個室点さず十三夜

「罌粟の昼」昭和二十六年 二十七歳

昼ふかき囁りやがて夢となる

血を享けしぬくもり罌粟の昼ふかし

梅雨の夜を鳴るはわが吸ふ酸素のみ

屍守る灯のゆらぎては花圃照らす

柿紅しいつまで病みて母泣かす

冬夕焼老いて短き母の文

水原秋桜子

古賀さんの病床句に共通な点としてとりあげ得るものは、どの句にも病床らしい暗さがなく、むしろ明るく美しくさえあって、一読明快である上に、音誦はよく整い、ふかい心の翳が流れる如く読者の心に浸みとおって来ることにある。一般に病床で詠まれた句は、心の翳がふかく、どちらかといえば、暗い悲痛な印象をあたえるものが多い。ところが古賀さんの場合は、その暗さが少なく、ほのぼのとした明るさが添っている。こういうことは古賀さんの生れながらに得た性格に基づくものであろう。

『洗禮』「序」より。

「寒林」昭和二十七年 二十八歳

風花や受洗の朝の髪梳かる

主に祈る花菜あかるき中に臥し

初燕圃にひるがへり復活祭

熱にもゆる手を組み祈るいなびかり

祈りて久し薔薇色の雲寒林に

淡雪や附添が湯へ誘ひ合ふ

安静時花圃なる声はわが女医か（昭和二十五年）

苺売かなし木蔭に子を待たせ（同二十六年）

勉学中の弟へ

汝が行手さへぎり病みて五月憂し（同三十年）

血を喀けば勿忘草の瑠璃かすむ

かなかなや死へ刻々と友眠る

秋祭りこえて誰も黙し臥す

帰燕けふ窓掛ひらく日のつづき

「二年に余る暗室生活からやっと解放された。秋の空が湖のように美しかった」『自註 古賀まり子集』より。

参考 今年また臥して祭を遠くききぬ 小山寒子

玉の緒の絶えなばゆかん方おぼろ 植山露子

「紅梅」昭和二十八年 二十九歳

紅梅や病臥に果つる二十代

病中、何故生きなければならぬのか苦しみ、一つの深い渦の中で踳いた思い。悲しいつらい事ばかりなら、与えられたひと時ひと時を歡びとしようとした可憐な思い。どのような明日が待っていないようとも、今のひと時を愛して逆らわずに生命の限り、生きて生きて、生きのびようとした強い思い。私丈に与えられた私だけの人生なら、死んではならない時に死ぬまいとした思い。顧みれば、一齧一齧己れ愛しい事ばかりです。

『洗禮』「後記」より

花の夕皆臥すいのち愛しみつ
緑立つ日々を癒えたし母のため
風の罌粟かがやく見つつ食すすむ
かなかなに送る病舎のはづれまで
師走わが母が手術の金つくる
枯木星胸に砂囊の夜がながし
壊えし肺とり安らかに年暮るる

「晩涼」昭和二十九年 三十歳

遺すべく書きし文焼く蝶の昼
肺とりし胸に触れつつさくら散る
清拭の湯に足浸し麗らなり
春菊の香や癒えてゆく朝すがし
晩涼や母も在します祈の座
霜の柚子ひかり脱力感しるき

「花いちご」昭和三十年 三十一歳

風花やごころに母の愛ともる
花いちご母より先の死を願ふ

外泊許可、入院より六年の歲月流る

障子白く爽やかに覚めわが家なり

「さくら散る」昭和三十一年 三十二歳

さくら散る安死願ひし日は遠く

退院、白き羽根巻ゆく日なりき

母の背に櫟ほぐれて光降る

馴れぬ職おろおろと菘さかり過ぐ

患者なき夜を盛るおのが風邪薬

二部「運河のほとり」

「走り梅雨」昭和三十二年 三十三歳

あたたかき夜を酔ひ戻る患者あり

青あらし蹠白く工夫逝きぬ

「日焼と健康とは一致しないということを知った。

地下足袋をはいていた足の裏が妙に白かった」

『自註 古賀まり子集』より。

死ぬために来し痢者迎ふ祭の夜

「行き倒れ患者の衣類を鋏で切りDDTをかけて

虱退治。着替えをさせて、若い看護婦が二階まで背

負ってゆく。私は感動の余り、口もきけなかった」

『自註 古賀まり子集』より。

港湾夫逝きぬ運河に蝶舞ふ日

病み涯の屍かろし走り梅雨

松虫草癒えてわが立つ影淡し

足袋白きを日々の幸とし年果つる

「遠き辛夷」昭和三十三年 三十四歳

癒えてみな嫁げり遠き辛夷揺れ

心まづ濡れ枯園の雨あたたか（昭和三十四年）

生きがたく生きし身愛す夜の緋桃（同三十五年）

梅雨の雷愚直の心ずぶ濡れに（同三十七年）

さるをがせ霧にかがやき尾根明くる

患者みな故なくすさび大暑来ぬ

かなかなや屍に着せむ肌着縫ふ

身一つの入院迎ふ野分中

北荒び死よりも癒ゆる日を恐る

こころ寒き一日綿虫野に淡し

「藤淡く」昭和三十四年 三十五歳

眉寒く若し父母の名秘めて死す

半衿の純白好む風邪のあと

藤淡く心かげらす何の情

病歴が生涯阻む青あらし

人夫らの癒えはやし麦熟れそめて

秋暑し自殺死が待つ朝の事務

虫ほろぶ夜は心の睡り欲し

「蟻の町」昭和三十五年 三十六歳

聖夜しづかに十字架が守る屑部落

冬日棒なし遺愛オルガンは今も歌ひ

息白く千地撰る手のみな生きて

「背負籠貸します」寒風が裂く軒低き

瓦礫の間萌えてはためく子の襁褓

土手萌えて裾かろく立つ舂妻

星降りり輪飾白く舂満ち（昭和三十六年）

舂来て樹下に濯ぐも立夏なり（同三十六年）

舂みち寒明けの雨いさぎよし（同三十八年）

おぼろ夜の過労崩るる心より

芝ざくら癒えて働く息愛す

稲びかり一途に生きし過去照らす

笹鳴を聞き捨てて来し耳さびし

運河の上星生き降誕祭近し

「風花」昭和三十六年 三十七歳

屍包む毛布一枚風花す

白息の細くたしかに母癒えぬ

母癒えぬ寒の厨に塩光り

風みどり母が落煮る時かけて

母健か日の渦匂ふキャベツ畑

母と子の祈り一つに門火澄む

今年また母と生きつつ菊焚きぬ

母幾年琴爪はめず落葉降る

隠れ飲む葉きらきら土用照り

炎天の一人となりて自負ゆらぐ
穂草たけ血液銀行裏かわく

屋台の灯運河に生きて去年今年

「春疾風」昭和三十七年 三十八歳

春疾風花の如くに屑乾く

悲しみに素直にひたり冬ながし

梅雨の雷愚直の心ずぶ濡れに

乾きたる心にひびき花火散る

髪解けば胸ほぐれゆく秋ざくら

冬青空髪切り淡き思ひ断つ

失意今日心に近く落葉降る

病めば死が何時もそびらに柳散る

歳晩の屑山白く雨そそぐ

「春雪」昭和三十八年 三十九歳

春雪に出づる屍奇蹟なし

風に鳴り日に鳴る枯葉受難週

髪の毛根に沁みて蝸鳴き終る

過去負ひて女はさびし鳳仙花

鶏頭の露冷えきつて人とほし

祈り充つ心の内外露光り

日雇の荷よりころげて青蜜柑

甲斐駒に雪来て畑の菊刈れり

落葉松の散るや炉址のぬくもりて
望郷台禱となりて穂絮とぶ
望郷台子も立つや多摩しぐれつつ

令和7年 春季俳句講座

「第一句集を読む―師系を超えて(8)」

◆第1回講師―山西 雅子

動画配信日 4月15日(火)

◆第2回講師―森賀 まり

動画配信日 4月22日(火)

◆第3回講師―中村 雅樹

動画配信日 4月29日(火)

◆第4回講師―横澤 放川

動画配信日 5月6日(火)